

あとがき

昭和五十五年六月十二日は、日本国内はもとより国際的にも大きな衝撃を与えた日でありました。大平正芳總理の身近にお仕えしていた私どもにとっては、總理の急逝はあまりにも冷酷非情な出来事でありました。呆然自失の裡にも、やがて残された私どもは、大平總理の生前の事蹟をできるだけ早い機会に正しく記録に留めることが、私どもに課せられた大きな使命である、と考えるようになりました。

七月九日、總理の内閣・自由民主党合同葬儀が終った頃から、この企画も次第に固まり、伊東正義、森永貞一郎両先生が刊行事業の代表世話人をお引き受け下さって刊行会編集委員会が組織されました。刊行会は十月十三日に第一回編集委員会を開催して、『大平正芳回想録』全三巻のおよその構想を取りまとめ、本格的な活動を開始いたしました。

以来、昨年六月の一周忌を前にして第一巻「追想編」を刊行したのに続いて、このたび三回忌を前にして第二巻「伝記編」と第三巻「資料編」を同時に刊行して、總理のご霊前にお供えすることができるようになりました。この仕事に着手した当初は、私どもの非力さや時間的制約などから、このような大事業を予定通り成し遂げることができるとかどつかについて、内心の不安や躊躇を抑えることができませんでした。私どもの念願が不十分ながら実現したことは、ひとえに各界皆様のご協力ご支援の賜であります。心から御礼申し上げる次第でございます。

以下、簡単に全三巻の編集内容と経緯について記させていただきます。

まず全三巻を通ずるものとしては、題字を井上靖先生、カバー装画を平山郁夫画伯、各巻の装画を奥田元宗、荻須高徳、山口華楊、西村龍介各画伯にお願いし、ご快諾をいただき、丹精込めた作品で飾ることができました。

いずれも福本邦雄氏にお世話いただいたものであります。

第一巻「追想編」 本編は大平総理と生前親交の深かった各界の方々の珠玉の追想文を集録いたしました。海外からのご寄稿も含めて、二百余篇という異例の多さとなりましたが、これでもなお親しい方々のすべてを網羅することは到底できませんでした。また紙数の制約のために、玉稿の一部を止むなく割愛せざるをえませんでした。併せてご海容いただきたいと思ひます。編集には小国宏、齋藤英夫、福島正光が当たりました。

第二巻「伝記編」 本編は大平総理の少年時代から壮絶な最期を遂げるまでの七十年の生涯を事実を中心に伝記的に記述いたしました。公文俊平、香山健一、佐藤誠三郎三教授の監修のもとに、編集委員がデュータ原稿を執筆し、これにもとづいて阿部穆、福川伸次、福島正光、安田正治が各時代を分担執筆したあと、福島が総合調整、文体統一に当たりました。

この間、三教授には行き届いたご指導ご配慮をいただき、感謝いたしております。また国会議員、報道関係の皆様ほか百数十名の方々に、座談会、個別取材、資料収集等の面で、ひとかたならぬお世話になりましたことを心から感謝申し上げます。本文中扉裏カットは、三豊中学の後輩・田中岑画伯のご協力をいただきました。

監修者、執筆者の内容検討会は二十数回をかさね、編集委員による原稿、校正刷りの査読で誤りの少なきを期したつもりであります。なお足らざるどころ多々あるのを惧れております。ご叱正を賜れば幸甚に存じます。

第三巻「資料編」 本編は大平総理の写真集、論文演説集、年譜の三部構成となっております。写真は平家はじめ各方面のご協力によって、未発表の貴重なものがかなり集録できました。論文演説は、政治家としての主要なものを網羅するとともに、総理の思想の発展が理解できるように卒業論文など各時期を代表するものを集録しました。年譜は総理時代の毎日の記録を紹介できましたが、その他の時代は紙数の関

係で簡単にせざるをえませんでした。編集には斎藤英夫・小国宏・福川伸次が当たりました。

なお全三巻の造本ならびに「資料編」写真集のデザインは丸亀中学出身の花岡浩氏のご協力を得ました。

以上、全三巻の刊行の経緯を顧るとき、私どもは改めて、大平志げ子夫人をはじめ大平家の皆様から終始あたたかいご理解を賜り、また総理ゆかりの方々から、各般にわたってこの事業に寄せられたご支援ご協力の大きさを痛感いたします。重ねてお礼申し上げますが、紙面の都合ですべての方々のお名前をここに記すことができませんことをお許し下さい。

衆参両院の関係国会議員の方々、および事務当局各位、報道各社の皆様、内閣、総理府、外務省、大蔵省、通商産業省、経済企画庁、自由民主党、各国大使館、香川県、観音寺市、豊浜町、一橋大学、香川大学、観音寺一高・豊浜小学校・森田一事務所（荒井喜平、横山忠始、斎藤勝範、中嶋敏恵、萩野美智子）、多くの友人知己の皆様・出版実務でお世話になった皆様、神崎製紙、鹿島出版会、富士アドシステムの方々、ほんとうにありがとうございます。

最後に天に在ります大平総理の温容を思い浮かべつつ、最後までお側にお仕えした小国が、あとがきを纏ることになりましたことを、諸先輩にお断わりし、ご了承をいただきたいと存じます。

昭和五十七年五月